

＝ 園生活（集団保育）の意義 と 保育内容自己評価へのとりかかりを求めて ＝

その①：「3歳児における発達しらべ」～他・10年間の資料を紐解いて～

硯川和歌子（かっぱ保育園）木村昭仁（竜雲寺保育園）中島一（天野山保育園）江藤美信（清水ヶ丘保育園）

【研究目的】

新しい幼稚園教育要領案にも伺えるように、今後の保育に求められるものは「個性の重視」と言われている。確かに、統一された管理態勢からは画一的な人間が形成されやすいかもしれない。だからといって、個性ばかりを重んじる方向に走ってしまっただけではいかかなのであろうか。極端な話、個性だけをのびしていくのであれば、1対1の育児がベストとなってしまう。しかし、「社会」という視野で見ると、最低限のルールと精神的な強さを身につけておくためには、多数の中でお互いに切磋琢磨することの大切さも忘れてはならないと言えよう。

さいわいな事に、保育園は、かねてより『集団の中での個別保育』を（特に3歳未満児の保育内容として）行ってきた。『一人一人を見つめ育む保育』は既に保育界では重要視されている「得意分野」と言えるであろう。ところが、母親の子育て能力が懸念される昨今、子どもたちには年齢相応な生活力が身につけておらず、保育者は生活指導に多くの時間を奪われ、個別保育を推進しようにも、プロとしての技術が発揮できていない現状。例えば、配置基準では3歳児概ね20人を1人の保育者が担当することとなっているが、この保母定数の見直しは昭和44年以来行われていない。社会機能そのものが大きく変化している現在、既に最低基準は「時代おくれ」の何物でもない。これからは最低を論じるより最高最良の理想基準を考察する必要性を強く思う。しかし、理想には様々な要因があり（地域性や定員数など）一概に統一でき得るものでもない。だからこそ、今、保育園はそれぞれの園の事情や条件に適し、さらには各園の理念を失わない『自主基準』をつくるべきではないだろうか。

今回の研究目的は、この『自主基準づくり』と共に、保育者と子どもたちが互いに影響を与えつつ育ち合う「集団の意義」を確立した環境を整えるべく、今後望まれる保育内容等についての『自己評価づくり』を目指すものである。

【方法】

子どもたちの生活年齢(①)は、本当に低下しているのであろうか。私たち保育研究グループでは、その裏付けとして、平成9年度より調査を開始した。まず

はじめに、熊本市かっぱ保育園で昭和63年から継続して行っている「年齢に合わせた発達しらべ(②)」の10年間を比較してみた結果、「言葉・数の理解・色づかい」などの項目は上向き。「鼻水・指しゃぶり・おもらし」などもあまり見られなくなっている。反面、「箸の使い方・衣服の着脱」などの項目は下向き。「包む・拭う・付ける」などの作業は、明らかにできなくなってきたと現れた。体の発達や社交性は向上していても、基本的な生活習慣の自立や社会性における遅れが徐々に目立ってきていると言える。では、この「生活面での発達の下降傾向」は、どこの園でも起こっているものなのであろうか。メンバーは、それぞれの園における保育記録や観察記録類を紐解き、子どもたちの生活の様子を振り返ることにした。

《調査方法》第一段階として、保育所保育指針に謳われる5領域＝健康・人間関係・環境・言葉・表現＝を意識した10項目を設定。昭和63年から平成9年までの10年間、各園に通年在籍した3歳児を対象(③)に4段階評価＝よくできる・だいたいできる・あまりできない・まだできない＝を行う(④)。次に第二段階では、項目を10から25に増やし、同様に評価を行う。（グラフ等の資料は、発表当日配布）。また、年度内の発達変化を見るために、調査月は各年度6月と2月の2回とする(⑤)。さらに、0・1・2歳までに入園した子と3歳から入園した子の比較も行う(⑥)。

《評価方法》評価担当者は調査年度の担任もしくは当該年度から在職している保育者とし、複数意見を総括して判断することとする。（年度によって評価担当者の数が違っていても良い）

《調査箇所》メンバーが、石川・静岡・大阪・山口・熊本の各県に分散しており、特定の地域に片寄ったデータとはならない。

(①)：基本的な生活習慣を基準としたもの。

(②)：元来、クラス懇談会資料として利用。保護者と保育者が共通意識を持つことが目的で行なわれているもの。

(③)：3歳児とは、当該年度の4月生まれから次年度の3月生まれの児童。年度途中の入退園児は調査対象としない。

(④)：通常の段階評価では奇数段階で調査され

るが、あえて「どちらでもない」部分を削除し、「できる」か「できない」かの傾向を測る。

(㊟5)：新年度がスタートする4・5月はクラス内も落ち着かず連休も入る理由から、進級児も新入児もしっかりと園生活に馴染む6月に第一回目を。さらに年度内の変化を見る目的で、第二回目は進級前の慌ただしさを避けて2月の時点での様子を測る。

(㊟6)：保育園(集団)生活を1年以上経験した子と新入園児における何らかの違いが6月と2月の各月で、どのように見られるか、またどのように変化するかを知る。

【結 果】

当初の推測も含め、次のような傾向が読み取れた。
①多少の変動はあるものの、この10年での生活年齢の下降傾向は実測できた。②各年度の6月と2月の比較については、明らかに上向きの傾向が見られた。③集団生活の経験の有無の違いは、当初の予測ほど現れなかった。(①～③何れも、配布資料参照のこと)

[評価担当者の意見] = 10年前と比較して「今」に感じること = 1. 園児：自己をそれなりに確立させている。メディアの影響か、言葉の発達はすごい。やればできるのに甘えてしようとしな。精神的に幼い。我がまま・我慢ができない。落ち着かない・集中力が乏しい。抵抗力が劣ってきている。2. 保護者：父親の姿がよく見られるようになった。過干渉、育ちの芽を摘んでいる。叱るべき処、言い聞かせるべき処に言葉がない。3. 社会：個性の尊重を重視し、善悪などの判断や決断する能力を低下させてしまっている。4. 保育園：子どもを過信し、過大な注文をしている。年間通しての成長を見つめる気長な観察が大切。指示や命令が多く、子どもの意欲を低下させてしまっている。=総合所見= 1. 2歳児までに入園した子どもたちは、保育者の目も行き届き、精神的に満たされた生活の様子が伺えるが、3歳児から入園してきた子には、落ち着きがないと感じる。やはり、年齢別の条件は異なっても、保育者1人に対する担当児童の数が問題だと思う。2. 核家族が増加している現代、我慢することや自己主張を覚え、心身ともに成長していくためには、より保育現場の必要性・重要性を感じる。3. これまで、半ば義務的にとっていた記録だが、今後の保育への課題も含めて、改めて大切さを痛感した。4. 今回の調査を通して、子どものリズムが大人によって壊されていると感じた。少子化にともない、手をかけすぎた結果、依存が高まり意欲が殺がれてしまっているのではないだろうか。5. 食事・着脱・排泄などの自立

が、年々遅れて行っていると感じた。0歳児の入園も増え、特に大人の便利さのみが強調されている傾向がある。3歳未満児保育の内容をきちんと見直す時期にきているのではないだろうか。6. 3歳児に限らず、すべての年齢において、情緒・生活・運動面での変化を感じる。保育現場では、もっとゆとりある対応で成長を培っていかねばならないと思う。7. 今回の調査は、3歳児が対象であったが、生活習慣などで著しい変化を見せる2歳児においても比較を行ってみたいと思った。

以上のことから、常日頃漠然と感じていた「できなくなっていく子ども」に関するデータが、さまざまな背景を覗かせながらも、実測できたと言えよう。また、6月時点の評価と2月時点の評価とを比較した時ほとんどの項目において「上向きの数字」が現れた。これは、『保育園での集団保育の成果』を示すものに他ならない。

【考察および結論】

「できなくなっていく子ども」の背景には、保護者の子育て意識の低下も然ることながら、残念なことに保育自体の質の問題も如実に感じとられる。自らが、核家族・少子化時代に育ち、乏しい体験の中、十分な実習や実践経験も踏まずに就職してしまう「保育者」5歳児は1:30で見れても、新卒者には1:1の手が掛かると言われる程の現状。養成校への要望は別として、保育者の質を測る『自己評価』の必要性が、あらためて浮き彫りにされてきたようだ。

そもそも、保育園の存在自体「誰のためなのか」という点を、保育現場がもっとしっかりと自覚し、社会にも認識してもらわなければならない。ある意味、競争原理も結構。各園の地域性や事情に即した保育メニューを展開し、個性を強調しながら、良い影響を与えあう保育界の関係が要望されるであろう。現在の社会環境の中で、未来を担う子どもたちの育成に、また、子どもたち自身のためにも、保育園の存在が必要不可欠であることに誇りを持って行きたい。

【今後への展開】

今回の調査は、評価の際の視点統一などを再検討し項目も5つの領域にほぼ均等な25項目に増やし、現在継続中。『保育内容自己評価づくり』への大きな一歩を踏み出す道標になると期待している。(総合結果は大会にて)

◇日々の保育に心を注ぎながら、調査に参加された先生方の、貴重な意見感想さらには前向きな姿勢に感謝します。あなた方は、子どもたちの良き教科書です。